

「イスラエル建国史」

16 第1次世界大戦の影響

ユダヤ・中東研究家 滝川 義人



滝川 義人
Takigawa Yoshito

1937年長崎県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー（1968～2004）として勤務。

現在、MEMRI（メモリ、中東報道研究機関）日本代表。ユダヤ、中東研究者。

主要著書：『ユダヤ解説のキーワード』（新潮社）、『ユダヤを知る事典』（東京堂出版）など多数。

◆第1次世界大戦前の第2アリヤの時代（1904～1914年）は、シオニズム運動の推進派と反対派がせめぎあった時期であった。シオニスト kongress がエレットスラエル（イスラエルの地）への移住を本格的に推進する一方で、正統派のラビたちや民主的社會に住む世俗派ユダヤ人たちは、ユダヤ人社会は宗教共同体であり、独自の国家を持つ民ではないとしてシオニスト運動に反対した。このような状況の中で、列強諸国を巻き込む第1次世界大戦が勃発することになる。

はじめに

サラエヴォ事件（1914年6月28日、オーストリア・ハンガリー帝国のフェルディナント皇太子がセルビアの一青年によってサラエヴォで暗殺された）に端を發する第1次世界大戦は、33カ国が参加した世界規模の



フェルディナント皇太子

総力戦となった。戦闘員だけでも戦死数900万、戦傷2,000万という惨憺たる結果をもたらすとともに、ロシア、トルコ、ドイツ、オーストリア・ハンガリーの4帝国が崩壊し、ベルサイユ体制という新秩序を生み出した。ヨーロッパの少数民族問題については民族自決の原則が適用され、その他の地域でも民族解放運動が盛んになってきたが、それが結実するのは、第2次世界大戦後である。

ユダヤ人社会も、大戦で大きな影響をうけた。大戦時ウクライナとポーランドを襲ったボグロムは、1880年代、1900年代初めの事態と比べて、規模、残忍性ともに比較にならないほど大きかった。さらにパレスチナでは、トルコ政府によってユダヤ人が追放され、経済、農業の不振で、残留者の間に餓死者がでる状況となった。

一方シオニズム運動はイギリスを舞台にして展開し、国際的認知を得るまでに発展するのである。

トルコの参戦とシオニスト活動家の追放

1914年10月30日、同盟側にたったトルコが宣戦を布告、同年12月から敵国国籍者の追放を開始した。ヨセフ・トルンベルドール（1912年にロシアから

移住）のように、第1、第2アリヤで来たユダヤ人の多くは、同盟側の敵であるロシアの出身であった。12月17日、700人ほどがヤッフォで拘留され、そのままイタリア船フィオリニ号でエジプトへ追放された。

年が明けると、トルコ当局はシオニスト活動家を対象とするようになり、シオニスト kongress 代議員、土地購入の担当者、自衛組織ハシヨメル幹部が追放された。建国の功勞者ベングリオンやベンツビらは、5月に追放処分を受けている。

使用船舶は、イタリア、アメリカの中立国船が使われた。そのイタリアは1915年5月23日、オーストリア・



ヨセフ・トルンベルドール

ハンガリー帝国に対して宣戦を布告したので、同国船のヤッフォ寄港は不可能になった。その後アメリカの軍艦テネシー号が難民を運んだ。ちなみにアメリカの参戦は1917年4月である。



軍艦テネシー号

結局この難民のアレクサンドリア到着は、1915年9月23日をもって終わる。合計11,277人がエジプトへ移送された。ユダヤ人社会の人口の8分の1にあたる。ロシアの国籍者であるから、形式的にせよロシア政府が面倒を見なければならなかったが、そのロシアはタンネンベルクの会戦（1914年8月）でドイツに大敗し、惨憺たる状況にあった。国の出先機関にも援助能力はない。1914年12月18日、アレクサンドリアのロシア領事M・ペトロフが、

同地のユダヤ人社会に連絡し、698名の難民がポートサイドに到着したことを知らせるとともに、難民の世話を依頼した。

難民はアレクサンドリアのガバリ、マフルーザの両地域に収容され、

イギリス軍当局の管理下におかれたが、内務省の難民監督官の全般的監督のもとで、アレクサンドリアとカイロのユダヤ人社会が日常の世話をした。

トルンペールドールとジャボチンスキーの出会い

1915年2月23日、ガバイ難民キャンプでトルンペールドールは、ウラジミール・ジャボチンスキー（ヤボチンスキー、1880～1940）と名乗る人物と会った。面識はないが、互いに相手の活動は知っている。初対面で2人はすっかり意気投合した。

ジャボチンスキーは難民ではなく、ロシアのリベラル派新聞ルスカヤ・ベドモスチの移動特派員として連合国側のヨーロッパをまわり、北アフリカ取材でアレクサンドリアに到着したのである。

オデッサに生まれたジャボチンスキーは、アルタレナというペンネームを持つ文筆家で、日刊紙オデスカヤ・ノーボスチの文芸欄を担当していた。ヘブライ語とイーデッシュ語はもとより、ヨーロッパの主要言語を自由に駆使する語学の天才であったが、ヘブライ語を「我らが文化の言語」と位置づけ、ヘブライ語によるユダヤ人子弟の学校教育を普及しようと、ロシアで運動していた。

ジャボチンスキーは、それまで2度ポグロムを経験している。1900年代初めに発生した2度目のポグロムでは、最初に自衛組織をつくったグループの1人であり、キシニョフのポグロム（1904）で意を決し、シオニズム運動に身を投じたのである。民族の解放、独立には文武の備えが必要と考えるシオニストであった。

ジャボチンスキーは、移動特派員としてフランスのボルドーにきた時、トルコ参戦のニュースを聞いた。日ごろから「トルコの支配するところでは太陽は輝かず、草木も生育し

ない」と主張していたジャボチンスキーは、トルコ参戦がシオニズム運動にとって絶好の機会を提供している、と判断した。11月5日付で同志イスラエル・ビンヤミン・ロソブ



ジャボチンスキー

（1869～1948）宛てに出した書簡で、トルコをパレスチナから駆逐する目的で、ユダヤ人部隊を編成し、フランスやイギリスを支援する案を書きつづっている。見返りは戦後の独立である。ちなみにロソブは、サンクトペテルブルグのロシア石油

の専務理事を務めた実業家で、シオニスト行動委員会のメンバー（1907～1931）であった。

ジャボチンスキーは、モロッコへ渡る前、マドリッドにいるマックス・ノルダウの元を訪れた。オーストリア国籍のため、ノルダウは大戦勃発と共にフランスから追放され、スペインへ逃れていたが、シオニスト部隊の編成構想に賛成しなかった。戦争がどのような結果を生むのか現時点では不明であり、嵐が過ぎ去るまで静観するのが得策、とノルダウは言った。

ユダヤ軍団編成構想

トルンペールドールは、ユダヤ軍団編成構想を熱烈に支持し、行動派の2人はその夜（2月23日）難民委員会に諮り、部隊編成提案を賛成5、反対2、棄権1で可決し、軍団編成委員会を設けてしまった。

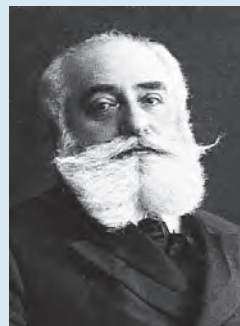
呼びかけに応じて200名ほどが集まり、その内約180名が志願書に署名したので、ジャボチンスキーを初めとする代表団が、3月15日にカイロのエジプト駐留英軍司令部（司令官ジョージ・マックスウェル中將）へ請願に行った。

英軍の反応は素気なかった。外

国籍者を対象とした実戦部隊の編成は軍法で禁じられている。兵站線維持を目的とする補助隊としてなら認められるが、現在パレスチナ正面の本格的作戦は検討されていないので、派遣されるとすればほかのトルコ正面であるというのが回答であった。

1875年にスエズ運河株を買収したイギリスは、1882年に軍事干渉を行い、エジプトを事実上保護下に置いた。結局イギリスは、1914年12月に一方的宣言で保護国化したが、それまでエジプトは名目上トルコの属領であった。トルコは参戦後第4軍所属部隊をスエズ正面に派遣し、1915年2月2日の戦闘で英軍に完敗していた。運河線を防衛し、ヨーロッパとアジアを結ぶ地域を確保するため、近い将来決戦が生起するのは必至であった。

パレスチナ正面でトルコ軍と華々しく戦って、パレスチナを解放する夢を持つジャボチンスキーは、兵站線維持が補給のことであり、補給が具体的には運搬係の意味だと聞いて、大いに失望した。大いに失望した兵士ではなく、運搬労務者である。1915年4月初旬、ジャボチンスキーはアレクサンドリアを離れ、イタリアへ向かった。その年の夏、ローマ、パ



マックス・ノルダウ

リそしてロンドンを訪れ、部隊編成の構想を当局者に話している。しかしどこでも冷たくあしらわれ、ジャボチンスキーは「失望と失敗の夏」と自嘲するのである。

しかし、トルンペールドールには別の考えがあった。役割は何であれ、トルコを敗北に追いこむ努力につながっていると、実績を積むことが重要であると主張した。そのうち新しい展望が開けた時、その実績がものをいうと考えたトルンペールドールは、英軍の条件を受け入れた。